英語教員指導力向上研修　『授業改善プロジェクト』　【平成１７年度のまとめ】

１　平成１６年度の成果と課題

【成果】

・参加者の多くが、授業改善という点については、本プロジェクトの成果を実感しており、全体的な成果は、昨年とほぼ同様の傾向を示している。
・特に、生徒理解に関する項目で効果が顕著であった。
・授業改善に取り組み、プロジェクトを完成させることが、達成感を与えている。
・アクション・リサーチについての理解が、全体的に広がってきている。
・職場内で同僚がアクション・リサーチを行うことは、授業改善に対する意識の改善に寄与する。

【課題】

・初期段階でのサポートが最重点課題である。
・効果的にメンタリングを行う方法を研究する必要がある。
・教科教育に関する専門的知識の向上は、引き続きの課題である。
・望ましい変化の捉え方、授業中の英語使用などの意識の点において、高校教員が、中学校教員に比べて十分でない。自己評価の基準が厳しいのか、成果があがっていないのか、検証する必要がある。
・授業での英語使用ということについては、継続的に意義を訴える必要がある。
・研修終了後に感じた意欲を継続させるための工夫が必要である。

２　平成１７年度の具体的な改善点

（1）リサーチ初期段階のサポートの充実【H17 重点】

・事前研修課題の分量を減量化し、オリエンテーションで充分に活用する。
・リサーチクエスチョン及び仮説設定の段階で、メーリングリストを活用して、サポートを実施する。
・指導主事が複数のメーリングリストを担当することとで対応する。疑問点が生じた場合は、アドバイザー（佐野先生）に相談する。
・文献研究を促すようにする。

（2）グループ編成の見直し　（プロジェクト班　＜　リサーチグループ）

・１プロジェクト班を３～４人とする。
・校種、テーマ別でリサーチグループを編成し、リサーチグループ毎にメーリングリストを設置する。
・リサーチグループ毎に担当指導主事を決める。
・オリエンテーションの受付後の座席をテーマ毎にする。その中で、テーマに応じて班編成を行う。

（3）年間の手順をより明確化かつ確実に伝達

・発表の手順、準備する資料などを明確に示しておく。
・ポートフォリオの作成についても十分な説明を行う。
・レポートの作成方法（誤字、脱字、推敲）、公文書の提出方法なども十分に説明をする。
・報告書の事前提出

（4）報告会の改善

・中間報告→ポスターセッション　報告会→研究発表形式　は変更なし。
・報告会での発表の持ち時間を十分にとれるようにするために、部屋数を増やす。そのため、各部屋の運営は、担当指導主事から参加者に変更。

（5）「定着」意識を浸透

・アクション・リサーチにより、授業改善は図られているが、それが、どの程度、生徒の変容や英語力自体の変容につながっているかが十分に検証されていない。年間を通して、「定着」という意識をもちつづけるよう意識を喚起する。

（6）教科教育の専門性・専門的知識の向上

・サポートの過程で、他の講義との効果的な関連付け図るように努める。

・予備調査段階での、文献研究を推奨する。

（7）研修の雰囲気づくり

・英語担当指導主事が主体者意識をもち、かつ、協力して「良い雰囲気」で参加者の先生方の自己実現を支援する気持ちをもつこと。

・英語力向上に向けての動機付けをさらに高める工夫を。

3　研修の評価－自己評価のまとめより

（1）全体の傾向

平成17年度			設問別平均			領域別
			高校	中学	全体	全体
1 教育的人間力	1	授業をする楽しさを感じながら英語を教えることができ始めている。	3.32	3.14	3.22	3.07
	2	生徒理解が深まり、生徒との関係も今までと異なる新しい見方ができ始めている。	3.05	3.07	3.06	
	3	授業の目標や手段や評価について深く考察する姿勢ができ始めている。	3.27	2.96	3.10	
	4	職場の同僚と英語教育の問題点について気軽に話をすることができる。	3.23	2.71	2.94	
	5	地域や生徒の願いを踏まえて、授業改善に前向きに取り組むことができ始めている。	3.05	3.00	3.02	
2 英語運用能力	1	研修実施前より一般的な英語運用能力が向上している。	2.59	2.32	2.44	2.85
	2	自ら設定した英語力目標に対する具体的な取り組み方を理解し、継続することができている。	2.82	2.68	2.74	
	3	授業中、最適なインプットを与えたり、生徒とインターアクションする割合が増えている。	3.05	2.86	2.94	
	4	可能な限り授業で英語を使おうとする前向きな意識が形成されている。	2.91	2.82	2.86	
	5	生涯にわたって英語運用能力の向上を図る意志ができている。	3.41	3.14	3.26	
3 英語教授力	1	アクションリサーチによる授業改善の方法を理解し、多少なりとも実践できている。	3.32	3.21	3.26	2.97
	2	課題としてあげた生徒の英語力に改善の兆しがみられる。	3.00	2.86	2.92	
	3	課題としてあげた生徒の授業態度に改善の兆しがみられる。	3.00	2.86	2.92	
	4	リサーチをした領域についての専門的な知識が増えている。	2.86	2.68	2.76	
	5	授業後、振り返り反省する習慣ができ、生徒による授業評価も改善の兆しが見られる。	3.18	2.86	3.00	
		平均	3.07	2.88	2.96	

平成16年度			設問別平均			領域別
			高校	中学	全体	全体
1 教育的人間力	1	授業をする楽しさを感じながら英語を教えることができ始めている。	2.95	3.12	3.04	3.04
	2	生徒理解が深まり、生徒との関係も今までと異なる新しい見方ができ始めている。	3.14	3.20	3.17	
	3	授業の目標や手段や評価について深く考察する姿勢ができ始めている。	3.00	3.12	3.07	
	4	職場の同僚と英語教育の問題点について気軽に話をすることができる。	3.00	2.96	2.98	
	5	地域や生徒の願いを踏まえて、授業改善に前向きに取り組むことができ始めている。	2.86	3.04	2.96	
2 英語運用能力	1	研修実施前より一般的な英語運用能力が向上している。	2.43	2.24	2.33	2.70
	2	自ら設定した英語力目標に対する具体的な取り組み方を理解し、継続することができている。	2.62	2.64	2.63	
	3	授業中、最適なインプットを与えたり、生徒とインターアクションする割合が増えている。	2.57	2.80	2.70	
	4	可能な限り授業で英語を使おうとする前向きな意識が形成されている。	2.67	2.92	2.80	
	5	生涯にわたって英語運用能力の向上を図る意志ができている。	3.10	3.00	3.04	
3 英語教授力	1	アクションリサーチによる授業改善の方法を理解し、多少なりとも実践できている。	3.05	3.16	3.11	2.84
	2	課題としてあげた生徒の英語力に改善の兆しがみられる。	2.71	2.92	2.83	
	3	課題としてあげた生徒の授業態度に改善の兆しがみられる。	2.76	3.12	2.96	
	4	リサーチをした領域についての専門的な知識が増えている。	2.38	2.48	2.43	
	5	授業後、振り返り反省する習慣ができ、生徒による授業評価も改善の兆しが見られる。	2.81	2.96	2.89	
		平均	2.80	2.91	2.86	

平成15年度			設問別平均			領域別
			高校	中学	全体	全体
1 教育的人間力	1	授業をする楽しさを感じながら英語を教えることができ始めている。	3.19	2.95	3.07	2.98
	2	生徒理解が深まり、生徒との関係も今までと異なる新しい見方ができ始めている。	3.10	3.03	3.06	
	3	授業の目標や手段や評価について深く考察する姿勢ができ始めている。	3.12	3.00	3.06	
	4	職場の同僚と英語教育の問題点について気軽に話をすることができる。	2.90	2.92	2.91	
	5	地域や生徒の願いを踏まえて、授業改善に前向きに取り組むことができ始めている。	2.76	2.82	2.79	
2 英語運用能力	1	研修実施前より一般的な英語運用能力が向上している。	2.31	2.26	2.28	2.67
	2	自ら設定した英語力目標に対する具体的な取り組み方を理解し、継続することができている。	2.57	2.44	2.51	
	3	授業中、最適なインプットを与えたり、生徒とインターアクションする割合が増えている。	2.71	2.72	2.72	
	4	可能な限り授業で英語を使おうとする前向きな意識が形成されている。	2.69	3.03	2.85	
	5	生涯にわたって英語運用能力の向上を図る意志ができている。	3.02	3.00	3.01	
3 英語教授力	1	アクションリサーチによる授業改善の方法を理解し、多少なりとも実践できている。	2.98	2.90	2.94	2.77
	2	課題としてあげた生徒の英語力に改善の兆しがみられる。	2.76	2.77	2.77	
	3	課題としてあげた生徒の授業態度に改善の兆しがみられる。	2.86	2.95	2.90	
	4	リサーチをした領域についての専門的な知識が増えている。	2.38	2.44	2.41	
	5	授業後、振り返り反省する習慣ができ、生徒による授業評価も改善の兆しが見られる。	2.83	2.85	2.84	
		平　　均	2.81	2.80	2.81	

【考察】

全ての領域で、過去２年間よりも、平均の数値は高いが、全体としては、概ね同様の傾向が見られる。高校の自己評価が、中学校の自己評価よりも高いことが、一つの特徴であると言える。

（２）設問毎の分析　　（参照　別添グラフ）

①教育的人間力

		H15	H16	H17	H18	H19
1	授業をする楽しさを感じながら英語を教えることができ始めている。	○	○	○		
2	生徒理解が深まり、生徒との関係も今までと異なる新しい見方ができ始めている。	○	○	○		
3	授業の目標や手段や評価について深く考察する姿勢ができ始めている。	○	○	○		
4	職場の同僚と英語教育の問題点について気軽に話をすることができる。		○			
5	地域や生徒の願いを踏まえて、授業改善に前向きに取り組むことができ始めている。			○		

４、３ポイントの合計が　（８０％以上○　５０％未満　×）

【考察】

・５の「地域や生徒の願いを踏まえて、授業改善に前向きに取り組むことができ始めている。」という設問で始めて、肯定的な評価が８０％を超えた。この設問に対する回答が増加したことは、アクション・リサーチの本来の趣旨が、着実に定着しはじめていることを示しているのかもしれない。

②英語運用能力

		H15	H16	H17	H18	H19
1	研修実施前より一般的な英語運用能力が向上している。	×	×	×		
2	自ら設定した英語力目標に対する具体的な取り組み方を理解し、継続することができている。					
3	授業中、最適なインプットを与えたり、生徒とインターアクションする割合が増えている。			○		
4	可能な限り授業で英語を使おうとする前向きな意識が形成されている。					
5	生涯にわたって英語運用能力の向上を図る意志ができている。	○	○	○		

４、３ポイントの合計が　（８０％以上○　５０％未満　×）

【考察】

英語運用能力については一朝一夕で高まるものではなく、このプロジェクトの中だけで高まったと考えることはできないだろう。そう考えると「１　研修実施前より一般的な英語運用能力が向上している。」への回答が連続して低いことはさほど問題ではないと言える。

むしろ、本年度の結果では、「３　授業中、最適なインプットを与えたり、生徒とインターアクションする割合が増えている。」が肯定的な評価が高まったことが重要であろう。特に、本年度は高等学校の割合が増えており、授業の在り方が少しづつ変化してきたことを伺わせる。

③英語授業力

		H15	H16	H17	H18	H19
1	アクション・リサーチによる授業改善の方法を理解し、多少なりとも実践できている。	○	○	○		
2	課題としてあげた生徒の英語力に改善の兆しがみられる。			○		
3	課題としてあげた生徒の授業態度に改善の兆しがみられる。	○	○	○		
4	リサーチをした領域についての専門的な知識が増えている。	×	×			
5	授業後、振り返り反省する習慣ができ、生徒による授業評価も改善の兆しが見られる。					

４、３ポイントの合計が　（８０％以上○　５０％未満　×）

【考察】

アクション・リサーチの理解、生徒の授業態度の変化とも、引き続き実感されているようだ。本年度は、全体的に自己評価が高い傾向があるのは事実だが、「２　課題としてあげた生徒の英語力に改善の兆しがみられる。」と「４　リサーチをした領域についての専門的な知識が増えている。」でも変化が見られ、アクション・リサーチ実施の成果が、より実感されていることが分かる。

（３）自由記述意見のまとめ

【自己実現】

・授業が楽しいと感じられるようになった。
・英語教員として変わりつつある自分に気づきました。
・自分自身のモーティベーションを高めることができた。
・授業（教授力）の源は生徒であると実感した。生徒の英語力、評価など、日々生徒の様子（実態）に励まされたり、考えさせられたりした。

【明確になった目標】

・リサーチ・クエスチョンを決めて目標をもつことで、毎日の授業に張りがでた。
・授業の取組が、数値目標という形で検証できた。
・テーマを絞ったことで、長期的、計画的に生徒の状況を考えながら授業にとりくめた。
・１時間１時間の授業に課題意識をもって取り組めるようになった。
・生徒が目標に到達しているかどうか、常に点検が必要であることがわかった。

【生徒との関係、生徒の変容】

・生徒の思いを確認できた。
・生徒の英語学習に対する本音が聞けた。
・生徒の意見も採り入れていくことが徐々にできるようになった。
・生徒との信頼関係ができた。
・絶えず続けて授業改善に努めていくことが、生徒と信頼関係を増していくことがわかった。
・生徒の多様な反応から、可能性は無限大ということに気づいた。
・アクション・リサーチをすることで生徒にも自己評価をさせることができた。

【授業の変容】

・授業を常に振り返り、検証することの大切さ
・授業で使う英語量が増えた。
・授業の内容、流れ、目標設定をより細かに、明確に考えるようになった。
・マンネリ脱出になった。
・工夫することで授業は変わるのだなあと思った。

【アクション・リサーチの力】

・課題を決めて自分をおいこんでいくことができた。
・１年間の資料を整理し、自分の授業の再点検ができた。
・アクションリサーチをするにあたり生徒との相互信頼が大切であると思った。
・アクションをおこすことが大事。何もやらなければ自分も変われないし、子どもにも変化がないことがわかった。
・アクションリサーチをすることで、生徒に熱意が伝わり、改善の兆しがみられた。
・自分の授業を生徒からの評価を受け入れて、冷静に反省する時間をとるようになった。
・日々取り組んでいることを、リサーチすることによって、効果があるかないのか、客観的に見て、ひとりよがりの授業展開になっていないかを振り返ることの大切な気付かされた。
・うすうす気づいていた自分の授業の進め方の癖などと向き合うことができた。
・テーマを決めているので、継続した取組ができやすい。
・リサーチクエスチョンを設定することで、生徒の実態を把握し、授業を組み立てようとするようになった。

【振り返り・省察】

・これだけ授業について悩んだ年はなかった。ただ、結果を欲張りすぎて、生徒を振り回したかもしれない。
・様々な新しいことに挑戦できたが、本当に力をつけられたかどうかは検証が必要。
・独りよがりになっていないかを反省することが多くなった。
・自分自身がいかにいいかげんにやってきたか、計画、アセスメント、英語力の具体的定義、ゴールの設定など。

【課題発見・反省・気づき】

・どこにどう焦点をあててやるかを慎重に選び、きちんとした計画を立てて取り組めば、もっと成果があがっていたと思う。
・年度当初に生徒に数値目標を与えることの大切さを実感した。
・生徒たちに様々な活動をやらせることの大切さ
・授業実践をするうえで大切なことは何かに気づいた。
・興味関心の低い生徒はなかなか意識を変えることが困難だった。
・自分自身の課題がわかった。
・３年間を視野に入れた現在の目標設定の大切さ。
・もっと、他の先生方と情報交換する必要があることに気づいた。
・想像以上に授業に対して考え方が固定化していた。ちょっとしたコツなどでも気づかないことがたくさんあると思った。
・自らに課題を設定し、実践、検証するということに大きな意味があることに気づかされた。
・生徒がどこにつまずき、どこがわからないのかを把握することによって、授業やテストを改善していくこと。

・語彙指導について様々な捉え方あることがわかった。
・具体的なデータをとることの大切さ。
・生徒の実態に応じて取組を変える必要性に気づかされた。
・漠然とした思いつきで授業をしても生徒の力の伸びにつながらないということ。
・教えっぱなしではだめで、確かな定着と結びつくための手だてや工夫が必要。
・授業を改善するプロセスがわかったような気がする。
・教師の授業の中身によって、生徒たちは大きく変容することに気づいた。
・結果はすぐにでないがあきらめずに取り組むことが大切とわかった。
・自己評価・自己点検の研究指定を受けているが、アクション・リサーチがそのまま生かせる。
・やりっぱなしではなく、データをまとめることにより、目にみえて課題や改善点が浮き彫りになった。
・活動の意図や目的が。生徒の現状に合っているか、ということや、どのくらい効果があったかということを、以前よりも意識するようになった。
・細かいステップや十分な準備がないと、生徒の負担になるだけで、意欲の向上や学力に定着にはつながらないことがわかった。
・どのような指導もあきらめずに続けることの大切さを再確認できた。

【ＦＤの芽生え】
・マンネリから脱却し、より良い授業の創造に向けて努力する姿勢が身に付いた。
・様々な実践を知ることの大切さ
・自ら学ぼうとする姿勢
・生徒との暖かい人間関係を築き、多様なニーズ応えていく
・英語の試験も受けたい、
・教科の専門的知識を高めたい。
・人事評価制度を活用して毎年テーマを決めて取り組んでいく。
・英語力アップ
・文献研究が必要

【同僚性】
・同僚の先生たちと密に話しあうことができた。
・工夫した資料を共有することができた。
・同僚あるいは地域の先生方と話し合いできるきっかけができた。
・若い先生方の様々なアプローチに感心し、自分もがんばろうと思った。

（４）担当者の観察

○３年間、Plan-Do-Check-Action を繰り返してきて、研修プログラムの改善がなされた。研修改善自体が一種のアクション・リサーチになっていたと感じる。そして、主催者の方にも様々な学びがあったと言える。
○オリエンテーションでは、課題発見のためのアクティビティーを実施するなど、内容をより具体化させることができた。
○やはり、仮説設定までを困難に感じるようである。引き続き、リサーチ初期のサポートの充実が必要である。
○夏期集中研修でのポスターセッションは、引き続き好評であった。特に、様々な実践のアイデアを交換できたことに意義を感じてくださったようである。
○佐野先生から定期的に配信してくださったメールは、非常に役にたち、勇気づけられたとの声が数多

く寄せられた。次年度も続けたい。

○ポートフォリオの構成において、体系性が弱く、十分な内省につながらない危険性があるものが結構みられた。

○ポートフォリオの質の二極化。与えられた課題のみしか綴じられていないものもみられた。

○メーリングリストでは、メンタリングを十分に機能させられなかった。

○最後の自己評価には、佐野先生が講演で述べた言葉、オリエンテーションでお願いしたこと、目指す教師像に書いてあることなどが、表現されていた。この研修のねらいの内在化が一定実現していると思う。やはり、目指すゴールについては、あきらめず語り続ける必要性を再確認した。

○若年層の熱意とパワーに感嘆する声があった。上手く活用したいものである。

○西部事務所管内の学力向上対策の協議会で、英語の CRT の成績の向上の報告があり、その理由として「英語教員研修でアクション・リサーチを行い、目標を設定して授業を改善していったことによるのではないか。」という報告があったそうである。必ずしも、アクション・リサーチのみが寄与したわけではないかもしれないが、このような形で研修が評価されたことは、素直に喜びたい。また、リサーチの成果の事後検証の必要性も示唆していると思われる。

○高知追手前高等学校では、学力向上フロンティアハイスクールの研究の一環として、英語以外の教科を含めて、全校でアクション・リサーチを実施してきた（３年間)。本年度の卒業生は、大学進学実績において、飛躍的な伸びをみせた。

○報告書に一部、特定のクラスや個人を特定されかねない記述があり、訂正をもとめたことがあった。これは、教室に根ざした研究であるアクション・リサーチの宿命のような部分もあるが、今後格段の配慮が必要である。

（５）リサーチ・アドバイザーからの助言

概ね、良いに内容であったとの評価をいただいた。しかし、改善点として、リサーチ・クエスチョンを設定するまでのプロセスの充実を指摘していただいた。

現在のプログラムでは、

リサーチ・クエスチョンの設定→予備調査→仮説の設定

と進むことになっているが、そのプロセスが直線的であるため、リサーチ・クエスチョンが十分に絞り込まれない傾向があるということであった。この部分は、リサーチの取組を容易にするため、簡素化していたのであるが、それがマイナスに働いたのであった。

そこで、本年度は、リサーチする問題の領域を決めてから、リサーチ・クエスチョン設定までの段階を、少し綿密に行い、十分に絞り込んでから仮説の設定、そして、実践に移ることができるようにする。以下の流れである。

問題の特定→予備調査→リサーチ・クエスチョンの設定→仮説の設定

５　まとめ

（１）平成１７年度の成果と課題

【成果】

○受講者の皆さんのアクション・リサーチに対する不安感を余り示さなくなってきた。３年間継続してきたこと、報告書を県内の全英語教員に配布していることなどから、アクション・リサーチという手法自体への理解はかなり進んだと思われる。

○リサーチを実施したことに対する、自己評価が過去で最も高くなった。このことは、必ずしも授業自

体が改善されたことは意味しないが、受講者の皆さん一人ひとりの実感や手応えとしても、アクション・リサーチの効果を認識しているということであろう。

○自由記述意見も、アクション・リサーチの意義や効果について、十分に理解しているということが読みとれる。また、実施初年度から、徐々に内容の深まりがある。単に「良かった」という感想ではなく、より自分自身のことを振り返る内容になってきたように思う。

○英語教育関係者外から良い評価を受けた。また、他教科におけるアクション・リサーチの取組でも学力向上において、成果を上げたことが報告されている。受講者の自己評価だけでなく、外部で一定効果が検証されたことは、重要なことである。

以上のことから、昨年度からの改善点としてあげた、リサーチ初期段階のサポートの充実、年間の手順をより明確化かつ確実に伝達、報告会の改善、研修の雰囲気づくりなどは、一定の成果があったと考える。

また、自由記述意見からすると、「定着」意識の浸透という点も、着実に達成されているようだ。

一方、教科教育の専門性・専門的知識の向上については、引き続き課題を残した。

【課題】

来年度は、主に下記の点の改善に重点的に取り組むことにする。

・リサーチ初期段階の充実
・ポートフォリオの質の向上
・メンタリングの効果的な方法の研究
・報告書の個人情報への対応

（２）平成１８年度の改善策

①仮説の設定までの段階を、より綿密に行うことにより、リサーチの質を高める。そのために、１年間に１つのアクション・リサーチに変更する。特に、リサーチ・クエスチョンの設定までのプロセスを充実させる。

②自律的にリサーチを進められるようにするため、「アクション・リサーチ・ナビゲータ」を作成する。

③中間報告、報告会の形式を変える。中間報告は、リサーチの質を高めることを目的として事例研究形式とする。最終報告会は、お互いの実践交流のためにポスターセッションとする。ただし、これまで「ポスターセッションが実践やアイデアを得る貴重な機会であった。」との声が聞かれたため、中間発表でも一定、実践の交流ができる機会は設けたい。

④アドバイザーの招聘の機会を、最終報告会から中間報告に変更する。

⑤ポートフォリオに体系性をもたせるために、内容物にある程度の指定をする。

⑥自己評価を、事前、事後に分けて、成果を具体的にみる。

⑦メーリングリストは、過年度受講者、当年度受講者を含め、１つとし、基本的に主催者側からのペースメーカー的なメールやリサーチ・アドバイザーからのアドバイスを配信するようにする。

⑧メーリングリストに代わって、電話によるメンタリングなどを取り入れ、受講者を支援する。

⑨報告書の様式を、グラフィカルなものに変更する。これにより、リサーチ全体の省察を確実にする。

⑩個人情報の保護という観点から、報告書原稿の提出前に、メンターとの原稿のやりとりを行う。

英語教員指導力向上研修(H15～19)

授業改善プロジェクトの達成目標

[目指す英語教師像]

良質の英語を使った授業を展開することができ(REAL English Teacher)、 省察によって授業を改善する方法を身につけ（reflective practitioner)、 新しい英語教育の創造に自ら積極的にコミットする英語教員 (self-directed teacher)

[授業改善プロジェクトの達成目標と評価の観点]

１　教育的人間力
（教職に対する情熱、使命感、生徒に対する教育愛）

１）授業をする楽しさを感じながら英語を教えることができ始めている。
２）生徒理解が深まり、生徒との関係も今までと異なる新しい見方ができ始めている。
３）授業の目標や手段や評価について深く考察する姿勢ができ始めている。
４）職場の同僚と英語教育の問題点について気軽に話をすることができる。
５）地域や生徒の願いを踏まえて、授業改善に前向きに取り組むことができ始めている。

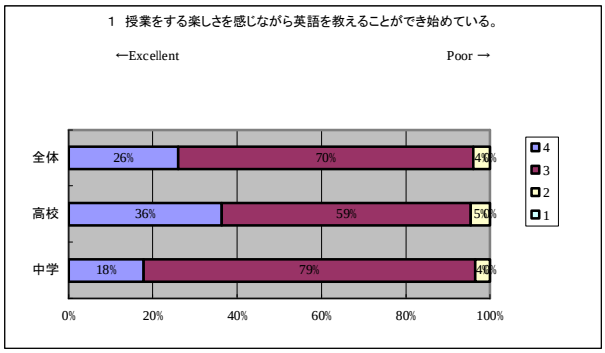
２　英語運用能力
（英語運用能力の向上とそれを生かした授業の実施）

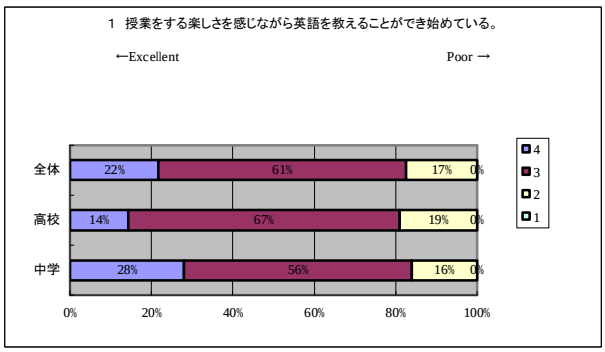
１）研修実施前より一般的な英語運用能力が向上している。
２）自ら設定した英語力目標に対する具体的な取り組み方を理解し、継続することができている。
３）授業中、最適なインプットを与えたり、生徒とインターアクションする割合が増えている。
４）可能な限り授業で英語を使おうとする前向きな意識が形成されている。
５）生涯にわたって英語運用能力の向上を図る意志ができている。

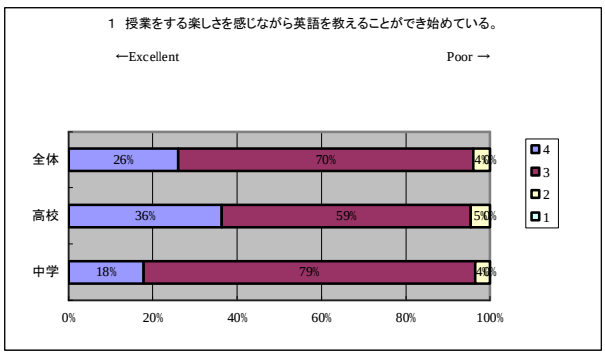
３　英語教授力
（教科指導に関する専門的知識と技能の向上）

１）アクション・リサーチによる授業改善の方法を理解し、多少なりとも実践できている。
２）課題としてあげた生徒の英語力に改善の兆しがみられる。
３）課題としてあげた生徒の授業態度に改善の兆しがみられる。
４）リサーチをした領域についての専門的な知識が増えている。
５）授業後、振り返り反省する習慣ができ、生徒による授業評価も改善の兆しが見られる。

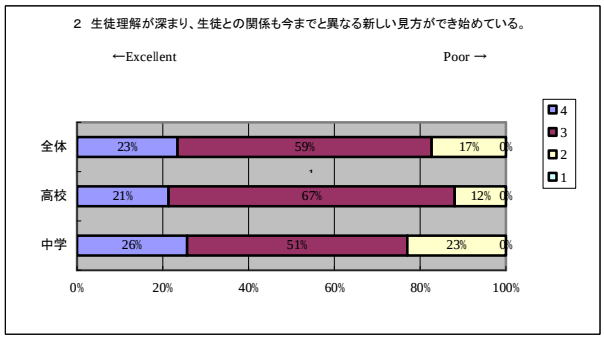
設問１－１

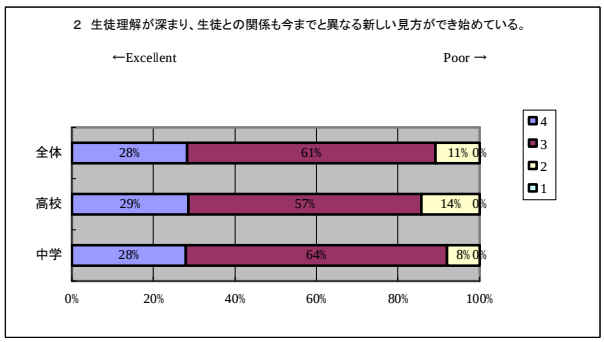

１　授業をする楽しさを感じながら英語を教えることができ始めている。
←Excellent
Poor →
全体
高校
中学
26%
70%
4%
0%
36%
59%
5%
0%
18%
79%
4%
0%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
4
3
2
1

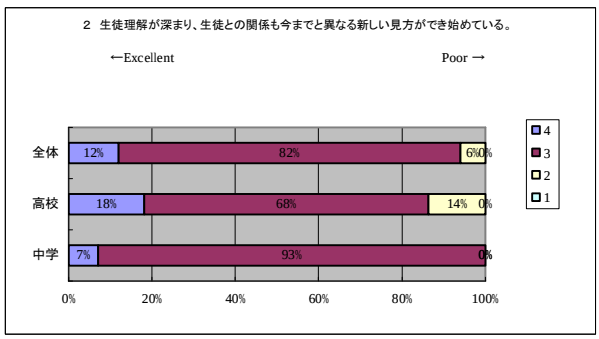

１　授業をする楽しさを感じながら英語を教えることができ始めている。
←Excellent
Poor →
全体
高校
中学
22%
61%
17%
0%
14%
67%
19%
0%
28%
56%
16%
0%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
4
3
2
1


１　授業をする楽しさを感じながら英語を教えることができ始めている。
←Excellent
Poor →
全体
高校
中学
26%
70%
4%
0%
36%
59%
5%
0%
18%
79%
4%
0%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
4
3
2
1

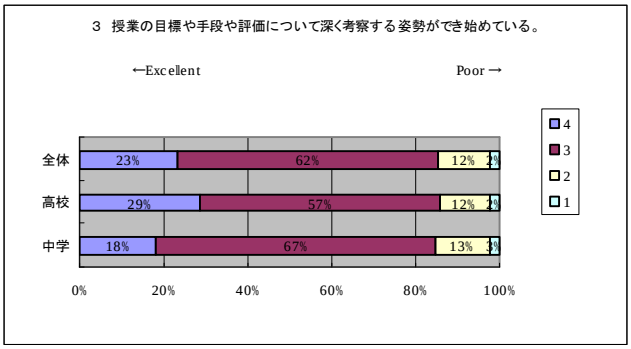
設問１－２

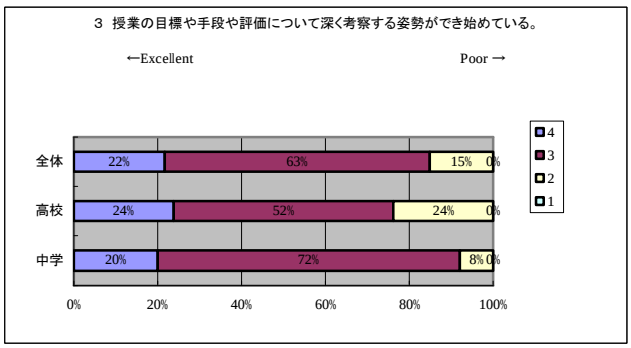

２　生徒理解が深まり、生徒との関係も今までと異なる新しい見方ができ始めている。
←Excellent
Poor →
全体
高校
中学
23%
59%
17%
0%
21%
67%
12%
0%
26%
51%
23%
0%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
4
3
2
1

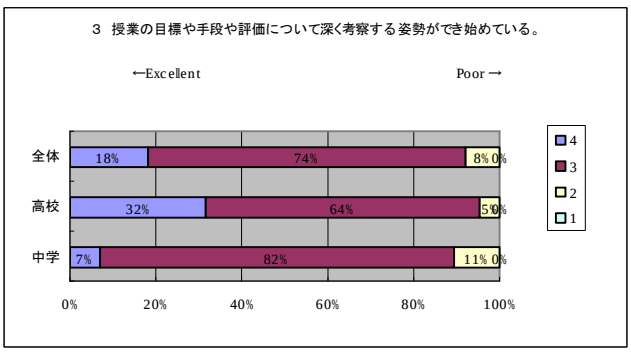

２　生徒理解が深まり、生徒との関係も今までと異なる新しい見方ができ始めている。
←Excellent
Poor →
全体
高校
中学
28%
61%
11%
0%
29%
57%
14%
0%
28%
64%
8%
0%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
4
3
2
1


２　生徒理解が深まり、生徒との関係も今までと異なる新しい見方ができ始めている。
←Excellent
Poor →
全体
高校
中学
12%
82%
6%
0%
18%
68%
14%
0%
7%
93%
0%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
4
3
2
1

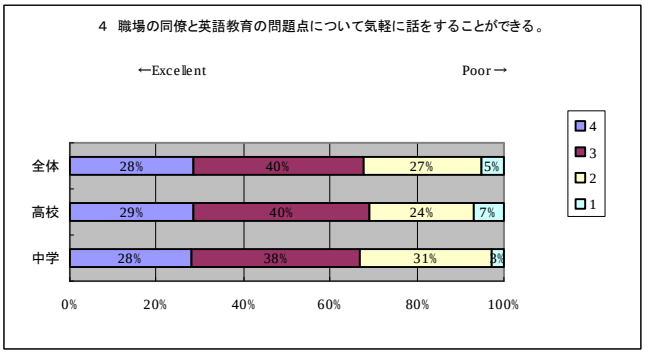
設問１－３

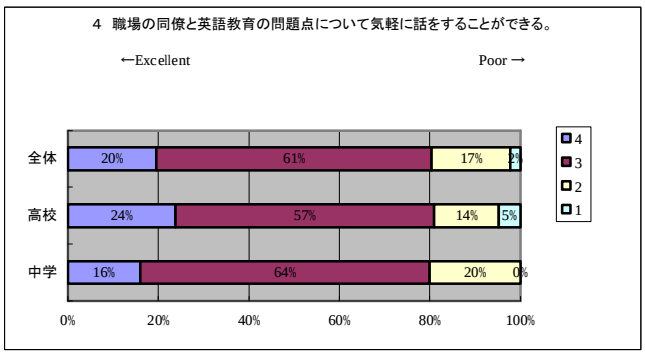

３ 授業の目標や手段や評価について深く考察する姿勢ができ始めている。
←Excellent
Poor →
全体
高校
中学
23%
62%
12%
2%
29%
57%
12%
2%
18%
67%
13%
3%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
4
3
2
1

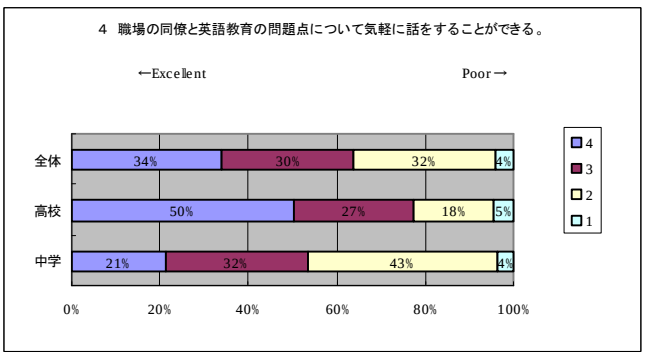

３ 授業の目標や手段や評価について深く考察する姿勢ができ始めている。
←Excellent
Poor →
全体
高校
中学
22%
63%
15%
0%
24%
52%
24%
0%
20%
72%
8%
0%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
4
3
2
1


３ 授業の目標や手段や評価について深く考察する姿勢ができ始めている。
←Excellent
Poor →
全体
高校
中学
18%
74%
8%
0%
32%
64%
5%
0%
7%
82%
11%
0%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
4
3
2
1

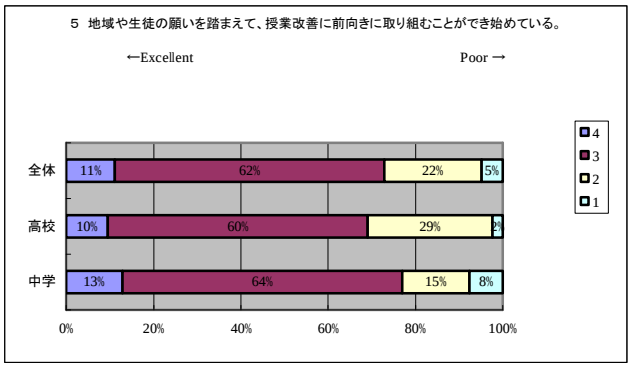
設問１－４

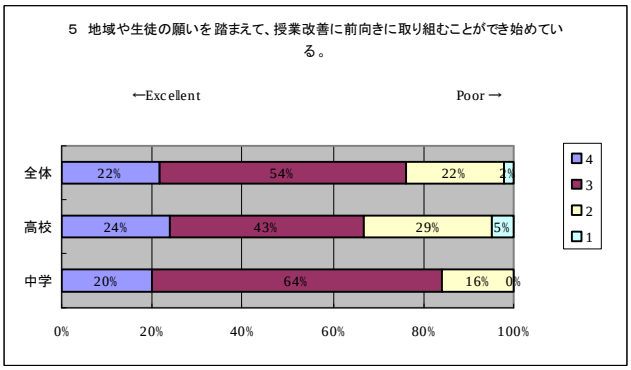

４ 職場の同僚と英語教育の問題点について気軽に話をすることができる。
←Excellent
Poor →
全体
高校
中学
28%
40%
27%
5%
29%
40%
24%
7%
28%
38%
31%
3%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
4
3
2
1

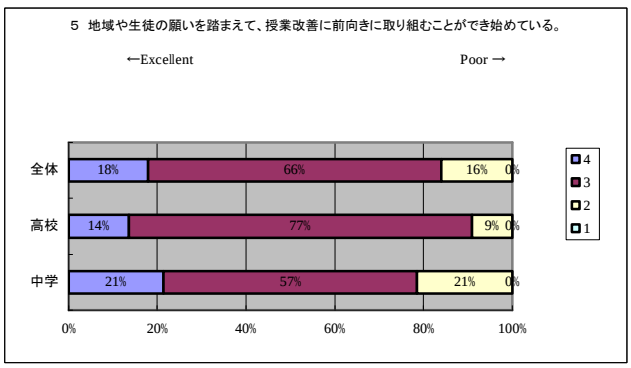

４ 職場の同僚と英語教育の問題点について気軽に話をすることができる。
←Excellent
Poor →
全体
高校
中学
20%
61%
17%
2%
24%
57%
14%
5%
16%
64%
20%
0%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
4
3
2
1


４ 職場の同僚と英語教育の問題点について気軽に話をすることができる。
←Excellent
Poor →
全体
高校
中学
34%
30%
32%
4%
50%
27%
18%
5%
21%
32%
43%
4%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
4
3
2
1

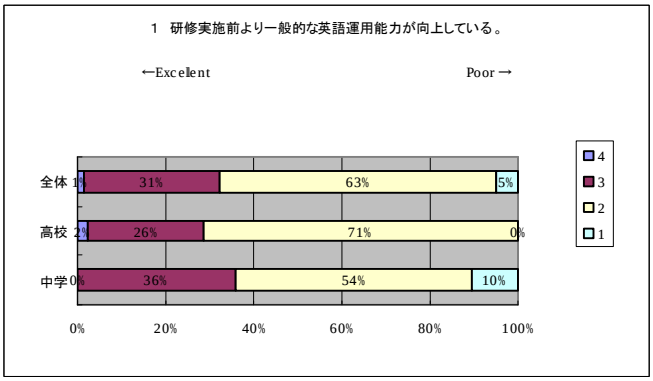
設問１－５

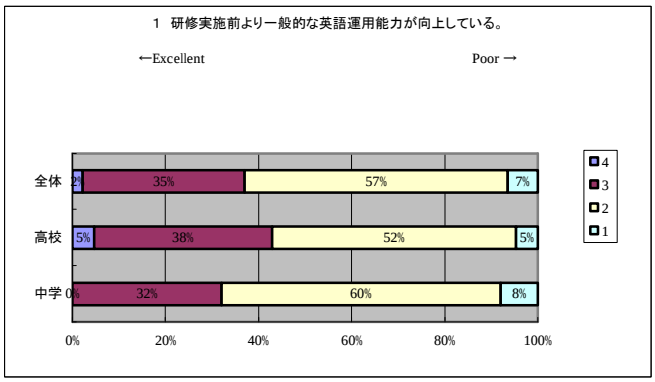

５ 地域や生徒の願いを踏まえて、授業改善に前向きに取り組むことができ始めている。
←Excellent
Poor →
全体
11%
62%
22%
5%
高校
10%
60%
29%
2%
中学
13%
64%
15%
8%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
4
3
2
1

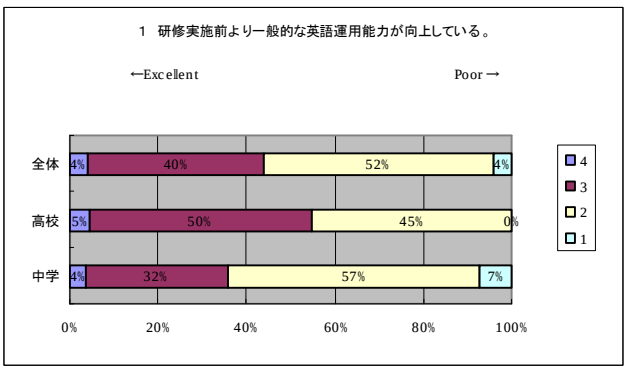

５ 地域や生徒の願いを踏まえて、授業改善に前向きに取り組むことができ始めている。
←Excellent
Poor →
全体
22%
54%
22%
2%
高校
24%
43%
29%
5%
中学
20%
64%
16%
0%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
4
3
2
1


５ 地域や生徒の願いを踏まえて、授業改善に前向きに取り組むことができ始めている。
←Excellent
Poor →
全体
18%
66%
16%
0%
高校
14%
77%
9%
0%
中学
21%
57%
21%
0%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
4
3
2
1

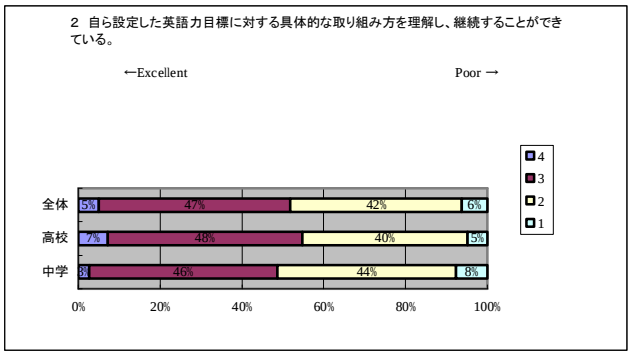
設問２－１

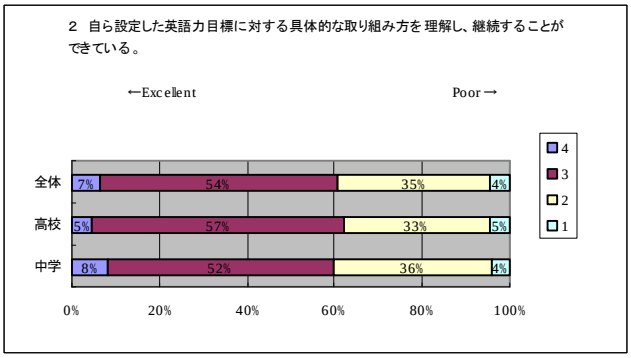

１ 研修実施前より一般的な英語運用能力が向上している。
←Excellent
Poor →
全体
1%
31%
63%
5%
高校
2%
26%
71%
0%
中学
0%
36%
54%
10%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
4
3
2
1

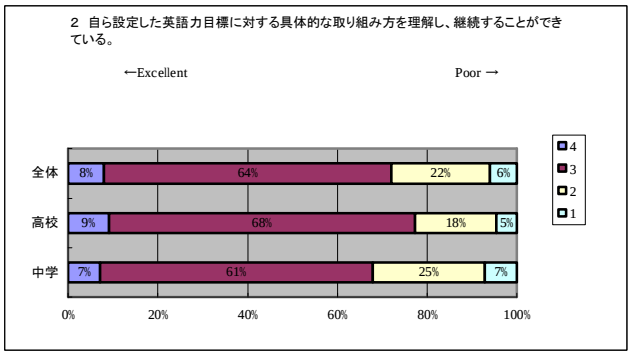

１ 研修実施前より一般的な英語運用能力が向上している。
←Excellent
Poor →
全体
2%
35%
57%
7%
高校
5%
38%
52%
5%
中学
0%
32%
60%
8%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
4
3
2
1


１ 研修実施前より一般的な英語運用能力が向上している。
←Excellent
Poor →
全体
4%
40%
52%
4%
高校
5%
50%
45%
0%
中学
4%
32%
57%
7%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
4
3
2
1

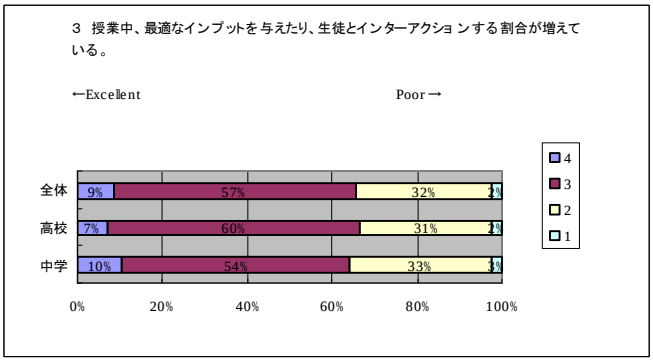
設問２－２

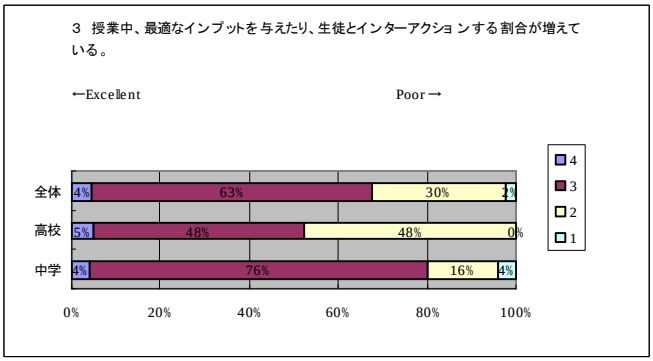

２ 自ら設定した英語力目標に対する具体的な取り組み方を理解し、継続することができている。
←Excellent
Poor →
全体
高校
中学
5%
47%
42%
6%
7%
48%
40%
5%
8%
46%
44%
8%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
4
3
2
1

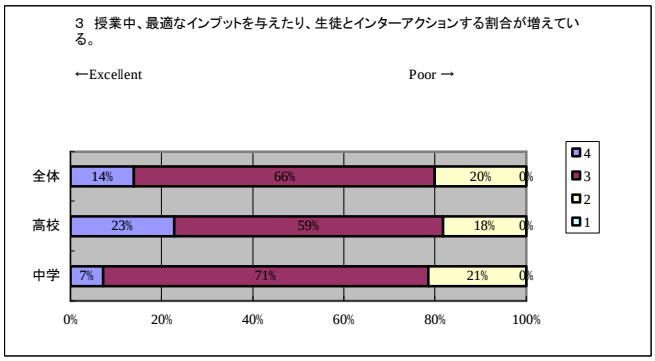

２ 自ら設定した英語力目標に対する具体的な取り組み方を理解し、継続することができている。
←Excellent
Poor →
全体
高校
中学
7%
54%
35%
4%
5%
57%
33%
5%
8%
52%
36%
4%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
4
3
2
1


２ 自ら設定した英語力目標に対する具体的な取り組み方を理解し、継続することができている。
←Excellent
Poor →
全体
高校
中学
8%
64%
22%
6%
9%
68%
18%
5%
7%
61%
25%
7%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
4
3
2
1

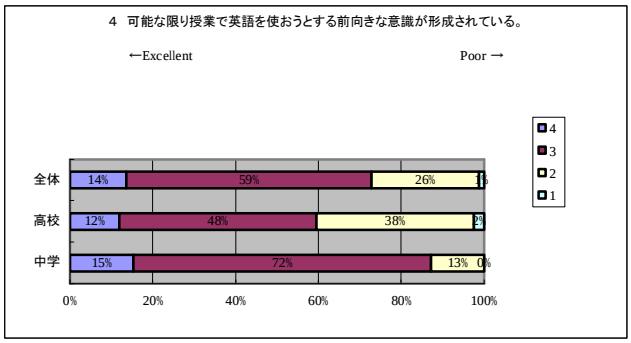
設問２－３

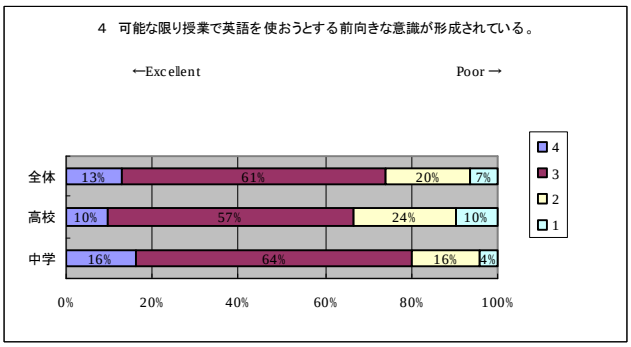

３ 授業中、最適なインプットを与えたり、生徒とインターアクションする割合が増えている。
←Excellent
Poor →
全体
高校
中学
9%
57%
32%
2%
7%
60%
31%
2%
10%
54%
33%
3%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
4
3
2
1

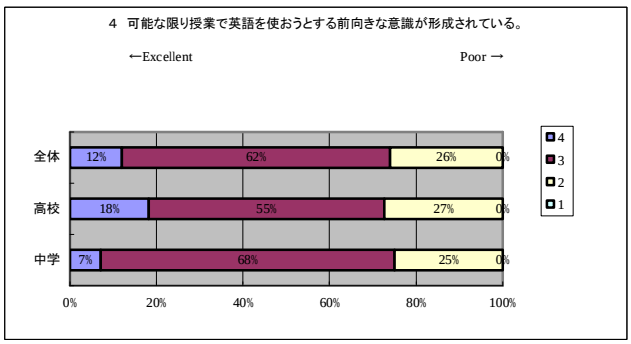

３ 授業中、最適なインプットを与えたり、生徒とインターアクションする割合が増えている。
←Excellent
Poor →
全体
高校
中学
4%
63%
30%
2%
5%
48%
48%
0%
4%
76%
16%
4%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
4
3
2
1


３ 授業中、最適なインプットを与えたり、生徒とインターアクションする割合が増えている。
←Excellent
Poor →
全体
高校
中学
14%
66%
20%
0%
23%
59%
18%
0%
7%
71%
21%
0%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
4
3
2
1

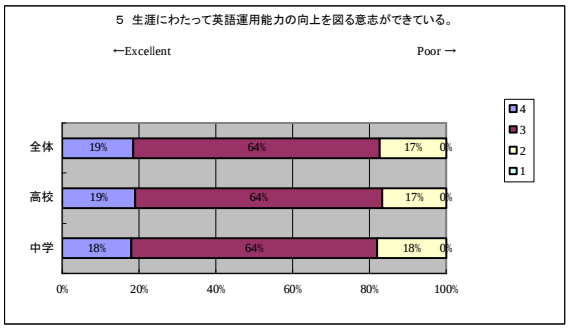
設問２－４

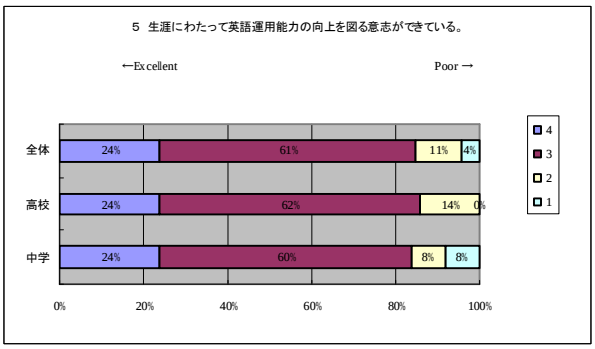

4　可能な限り授業で英語を使おうとする前向きな意識が形成されている。
←Excellent
Poor →
全体
高校
中学
14%
59%
26%
1%
12%
48%
38%
2%
15%
72%
13%
0%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
4
3
2
1

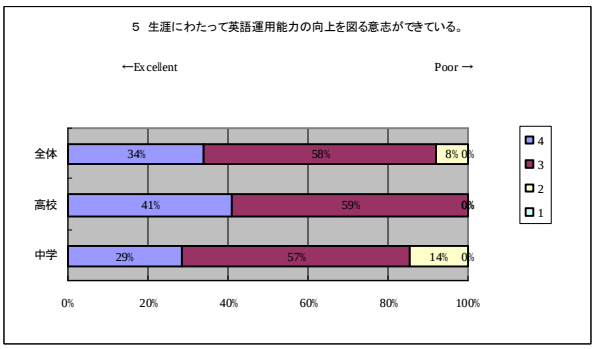

4　可能な限り授業で英語を使おうとする前向きな意識が形成されている。
←Excellent
Poor →
全体
高校
中学
13%
61%
20%
7%
10%
57%
24%
10%
16%
64%
16%
4%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
4
3
2
1


4　可能な限り授業で英語を使おうとする前向きな意識が形成されている。
←Excellent
Poor →
全体
高校
中学
12%
62%
26%
0%
18%
55%
27%
0%
7%
68%
25%
0%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
4
3
2
1

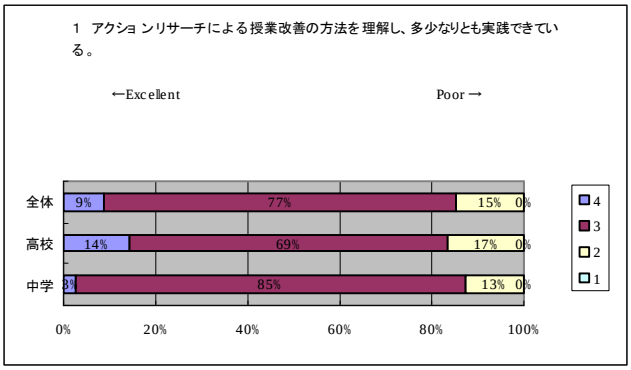
設問２－５

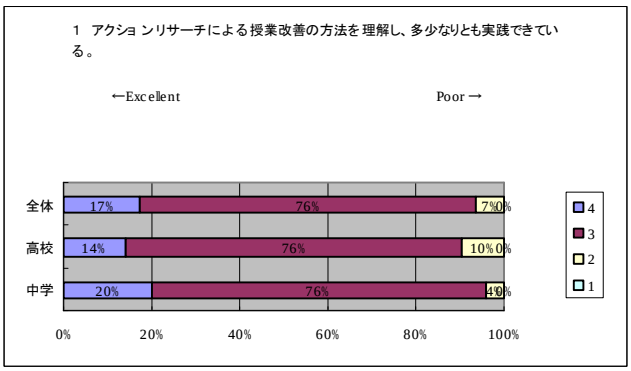

5　生涯にわたって英語運用能力の向上を図る意志ができている。
←Excellent
Poor →
全体
高校
中学
19%
64%
17%
0%
19%
64%
17%
0%
18%
64%
18%
0%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
4
3
2
1

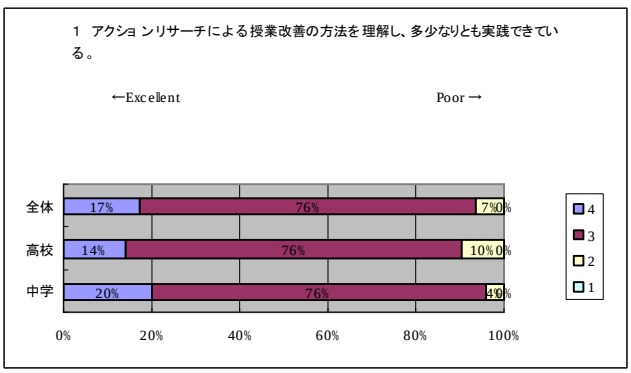

5　生涯にわたって英語運用能力の向上を図る意志ができている。
←Excellent
Poor →
全体
高校
中学
24%
61%
11%
4%
24%
62%
14%
0%
24%
60%
8%
8%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
4
3
2
1


5　生涯にわたって英語運用能力の向上を図る意志ができている。
←Excellent
Poor →
全体
高校
中学
34%
58%
8%
0%
41%
59%
0%
29%
57%
14%
0%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
4
3
2
1

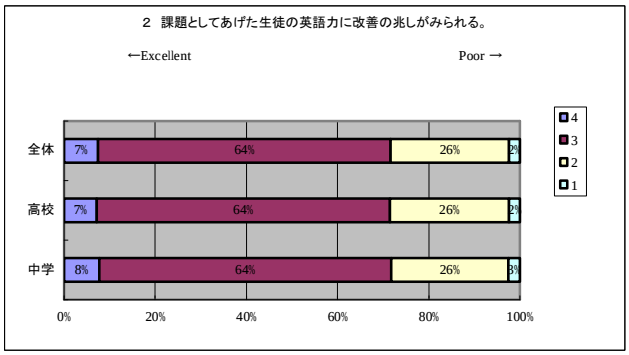
設問３－１

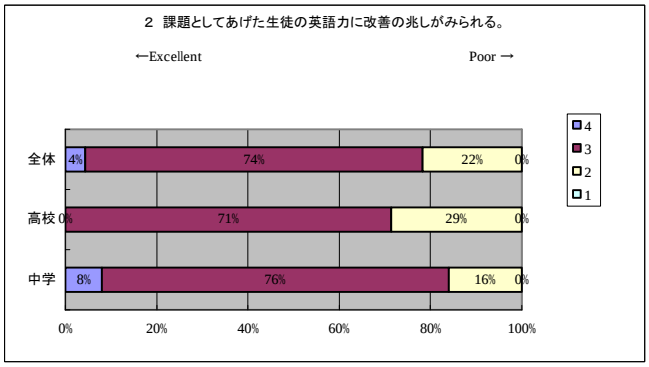

1 アクション リサーチによる授業改善の方法を理解し、多少なりとも実践できている。
←Excellent
Poor →
全体
高校
中学
9%
77%
15%
0%
14%
69%
17%
0%
3%
85%
13%
0%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
4
3
2
1

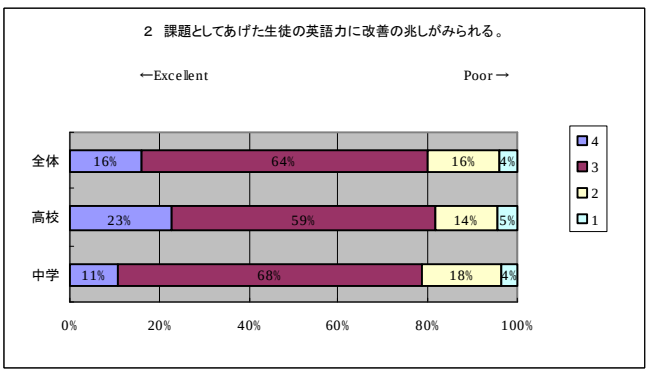

1 アクション リサーチによる授業改善の方法を理解し、多少なりとも実践できている。
←Excellent
Poor →
全体
高校
中学
17%
76%
7%
0%
14%
76%
10%
0%
20%
76%
4%
0%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
4
3
2
1


1 アクション リサーチによる授業改善の方法を理解し、多少なりとも実践できている。
←Excellent
Poor →
全体
高校
中学
17%
76%
7%
0%
14%
76%
10%
0%
20%
76%
4%
0%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
4
3
2
1

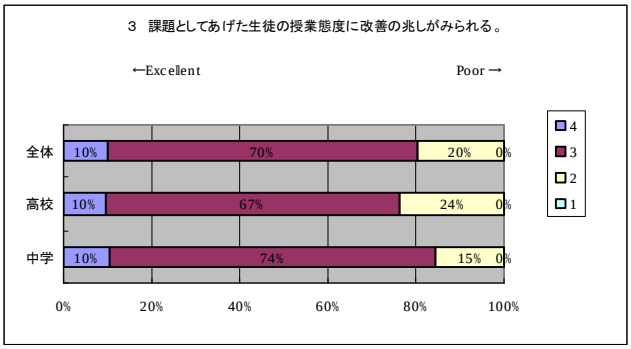
設問３－２

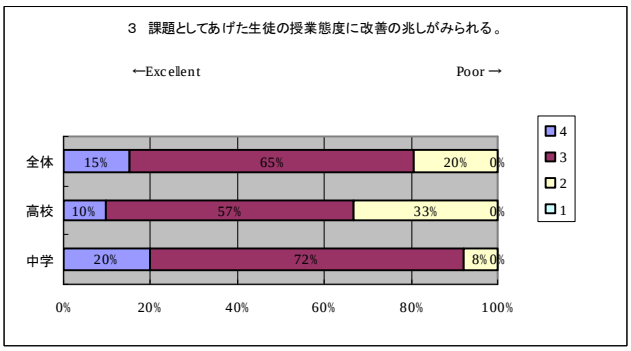

2 課題としてあげた生徒の英語力に改善の兆しがみられる。
←Excellent
Poor →
全体
高校
中学
7%
64%
26%
2%
7%
64%
26%
2%
8%
64%
26%
3%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
4
3
2
1

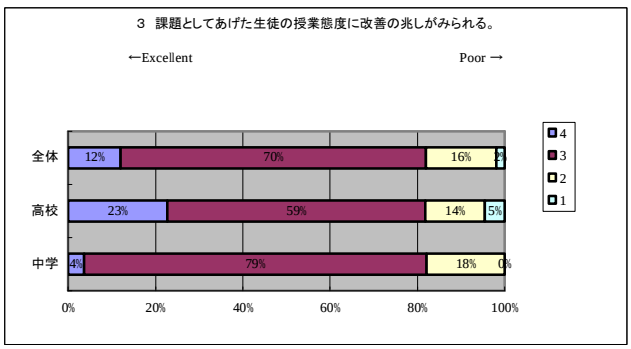

2 課題としてあげた生徒の英語力に改善の兆しがみられる。
←Excellent
Poor →
全体
高校
中学
4%
74%
22%
0%
0%
71%
29%
0%
8%
76%
16%
0%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
4
3
2
1


2 課題としてあげた生徒の英語力に改善の兆しがみられる。
←Excellent
Poor →
全体
高校
中学
16%
64%
16%
4%
23%
59%
14%
5%
11%
68%
18%
4%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
4
3
2
1

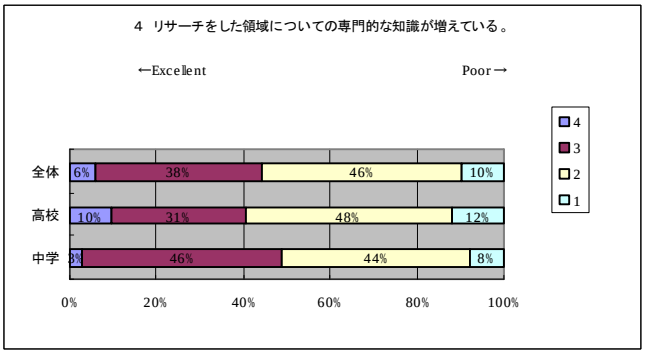
設問３－３

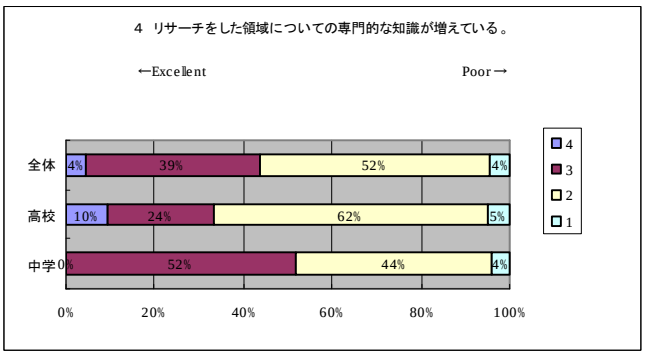

３　課題としてあげた生徒の授業態度に改善の兆しがみられる。
←Excellent
Poor →
全体
高校
中学
10%
70%
20%
0%
10%
67%
24%
0%
10%
74%
15%
0%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
4
3
2
1

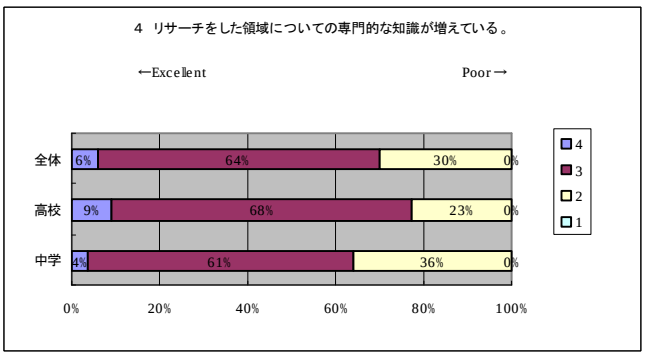

３　課題としてあげた生徒の授業態度に改善の兆しがみられる。
←Excellent
Poor →
全体
高校
中学
15%
65%
20%
0%
10%
57%
33%
0%
20%
72%
8%
0%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
4
3
2
1


３　課題としてあげた生徒の授業態度に改善の兆しがみられる。
←Excellent
Poor →
全体
高校
中学
12%
70%
16%
2%
23%
59%
14%
5%
4%
79%
18%
0%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
4
3
2
1

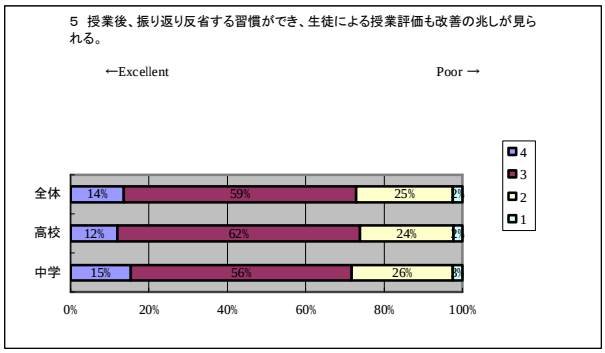
設問３－４

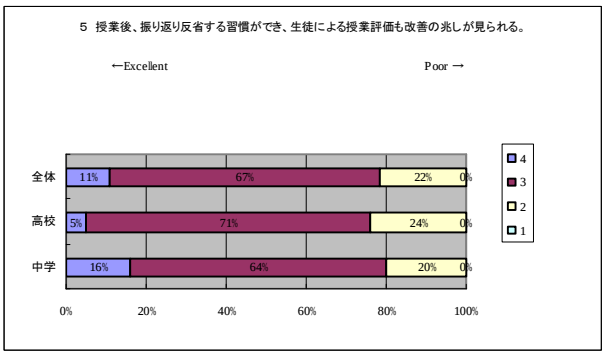

４　リサーチをした領域についての専門的な知識が増えている。
←Excellent
Poor →
全体
高校
中学
6%
38%
46%
10%
10%
31%
48%
12%
3%
46%
44%
8%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
4
3
2
1

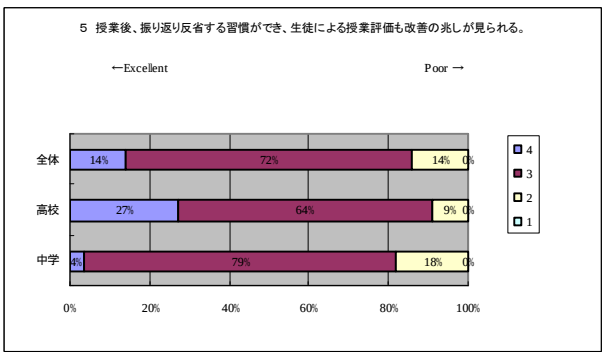

４　リサーチをした領域についての専門的な知識が増えている。
←Excellent
Poor →
全体
高校
中学
4%
39%
52%
4%
10%
24%
62%
5%
0%
52%
44%
4%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
4
3
2
1


４　リサーチをした領域についての専門的な知識が増えている。
←Excellent
Poor →
全体
高校
中学
6%
64%
30%
0%
9%
68%
23%
0%
4%
61%
36%
0%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
4
3
2
1

設問３－５


５ 授業後、振り返り反省する習慣ができ、生徒による授業評価も改善の兆しが見られる。
←Excellent
Poor →
全体
14%
59%
25%
2%
高校
12%
62%
24%
2%
中学
15%
56%
26%
3%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
4
3
2
1


５ 授業後、振り返り反省する習慣ができ、生徒による授業評価も改善の兆しが見られる。
←Excellent
Poor →
全体
11%
67%
22%
0%
高校
5%
71%
24%
0%
中学
16%
64%
20%
0%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
4
3
2
1


５ 授業後、振り返り反省する習慣ができ、生徒による授業評価も改善の兆しが見られる。
←Excellent
Poor →
全体
14%
72%
14%
0%
高校
27%
64%
9%
0%
中学
4%
79%
18%
0%
0%
20%
40%
60%
80%
100%
4
3
2
1